

2023年度 福祉学部
一般選抜 A 日程問題

国 語

2023年2月実施

出題科目	ページ	解答番号
国語 (100点)	4～20	1～26

注意事項

- 1 選抜開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見ないこと。
- 2 問題は4～20ページである。
- 3 選抜中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。
 - ① 選抜番号欄
必ず選抜番号（数字）を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。
 - ② 氏名欄
氏名及びフリガナを記入しなさい。
- 5 必要事項欄及びマーク欄に正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあるので注意すること。
- 6 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、**31** と表示のある問いに対して⑤と解答する場合は、次の(例)のように解答番号31の解答欄の**⑤**にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
31	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

- 7 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。

国

語

(
解答
番号

1

～

26

)

I 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

世界大戦が起きるかもしれないという予測は、悲観的に過ぎる、と言われるかもしれない。しかし、コロナ禍の経験を通じて世界共和国への歩みが始まるだろう、という予想よりは **a** である。世界共和国の必要性は、誰もが認識した。しかし、実際に起きそうなことは、どちらかと言えば、世界大戦である。 **A** 奇妙なことではないか。

それにしても、嫌な予感がする。この逆説にははっきりとした前例があるからだ。第一次世界大戦を経験した後、人々は戦争そのものを悪だと考えるようになり（それ以前は、ヨーロッパでは戦争は可能な政治手段のひとつとして認められていた）、永続する平和を確立したいと願ったはずだ、そのことをよく示しているのが、戦後、国際連盟が結成されたという事実である。しかし——永続的な平和どころか——、第一次世界大戦からそれほど時をおかずして、第二次世界大戦が勃発した。しかも、第二次世界大戦の原因、ドイツが戦争に踏み切った原因のひとつは、まさに第一次世界大戦の戦後処理の失敗にあった。永続的な平和を望みつつ実行した処理が、逆に、第二次世界大戦を招いたのである。

似たようなことが現在の **(注1)** パンデミックの後にも起きないだろうか。人々は、 **b** 連帯の必要はしっかりと認識したはずだ。その認識のもとでなされた行動が、しかし、連帯どころか戦争や次なる破局を招くことにはならないか。これは、 **(注2)** ヘーゲルが「理性の狡智」と呼んだ歴史のアイロニーの一種である。人々は、破局の処理に必ず失敗する。ヘーゲル風によれば、 **B** 破局の概念化から逃れる残余がある。その残余が、次の真の破局への道を開いてしまい、あたかも理性のずる賢い **わな** 罠にはまったかのようなことが起こる。

ともあれ、ここで考えてみたい。国境を超える連帯の必要性、階級的な格差を解消する平等性の必要性が理解されているまさにそのとき、逆に、世界大戦すらも招きかねない国家間の葛藤が生じ、同時に富んだ者がますます富み、貧しい者がますます貧しくなるような格差もかえって拡大してしまうのはどうしてなのか。

パンデミックを通じて、人々は、国民国家の範囲を上限とするような連帯によっては、問題は解決できない、ということ深く理解したはずだ、と述べてきた。しかし、連帯の単位が国民国家にある限りは問題に対応できない、という構造は、新型コロナウイルスのパンデミックに限られたことではない。実のところ、重要な課題、つまり今後一〇〇年単位の人類の幸福や繁栄を左右するような重要な課題は、ことごとく国民国家のレベルでは解決できない。地球環境問題も、核問題も、 **c** な不平等の問題も、あるいはインターネット上の知的所有権や個人情報保護の問題も、さらにはヒトゲノムの管理などの生命倫理の問題もすべて、国民国家の力では解決できない。

それどころか、これらの問題を深刻なものにしている原因こそ、人々にとって国民国家が第一義的なチュウ **⑦** セイ心の対象になっている、という事実である。たとえば、気候変動をめぐるパリ協定から、トランプ大統領（当時）のアメリカが離脱を通告したのは、国益を、つまりアメリカの企業の利益

を優先させたからである。富の格差は、もし地球上の全人口に対して、所得や資産についての **d** な税を課すことができればまちがいなく縮小するのだが、各国が、自国への投資を有利なものになるように税制度を決定すれば、逆に格差が大きくなる。要するに、国民国家こそが、最大の障害である。

こうなることには、強い論理的な必然性がある。このような状況のもとでは、道徳的に最も完成されているということと、逆に最も野蛮なことが逆説的に合致してしまうのだ。つまり **C** 道徳的に洗練されればされるほど、逆にますます暴力的で野蛮になる、という逆説が生じうるのだ。このような逆説を、一七世紀の哲学者トマス・ホッブズの理論から導くことができる。

ホッブズは、社会契約論の祖の一人であり、彼の著した『リヴァイアサン』は、現代の社会学や政治学でもしばしば引用される。

ホッブズはこの本の中で、国家がどのような論理で形成されるのかを論じている。ホッブズによれば、本来、人は自分自身の利益、自分自身の生存を目指している。ある個人の利益や生存は、必ずしも別の個人の利益や生存とは両立しないので、人々の間には闘争が生ずる。場合によっては相手を殺そうとするような闘争が、である。これが自然状態（最も原始的な状態）であり、「万人の万人に対する闘争」として描かれる。この血で血を洗う悲惨を克服するために、人々は一致して自分の自然権（自己の生存のために何をやってもよいという権利）を放棄し、これを、「リヴァイアサン」（旧約聖書に出てくる怪物）に喩えられる国家に委ねる。こうして、社会的な秩序が生まれることになる。皆の生存、すべての人の共存のために、自己の自然権を放棄した状態が、ホッブズの観点では、道徳的に完成された状態になる。

ホッブズは、一国しかないような世界について考えている。しかし、ホッブズの述べたことを、国民国家と国民国家が相互に国益を追求する競争状態において捉えるかどうか、考えてみよう。国民国家の利益のために、私欲を捨てて **e** に努力する人物は、最もよく教育された人であり、道徳的な完成度が高いと評価されるだろう。しかし、この同じ人の行動を国民国家と国民国家の間の関係の中に置いてみたらどうなるのか。この人物の自己犠牲的な行動は、特定の国民国家の生存だけを指す行動——他国の生存や繁栄を否定することも **①** ジさない行動——である。つまり、特定の国家にとって最も英雄的で崇高な行動が、国家間の関係の中で見れば、ホッブズの自然状態（野蛮な状態）における闘争行動として現れる。

たとえば、北朝鮮で核兵器の開発に努めた技術者について考えてみよう。この技術者は、北朝鮮にとっては英雄だが、国際関係の中では、野蛮な戦争の準備に関与していることになる。国民国家の間の競争というコンテキストの中では、最も優れた人、最も道徳的に洗練された人こそが、最も野蛮な人になる、という逆説は避けられない。

このような逆説があるがために、今日、すべての深刻な社会問題に関して、国民国家のレベルでの連帯は、逆に、問題を悪化させるように作用する。それなのに、未だに、人々が最も重視する大義は、国民国家のレベルでの利益や善である。どうしてなのかと言えば、破局はまだ先のことだと思われるからだ。セツ **②** パクしているようにも感じられてはいるが、しかし、破局はまだ訪れてはいない。たとえば、地球の温暖化によって、どこかの国が水没するのはもう少し先のことだ。そうだとすれば、破局はやってこないかもしれないか。そのように思う余地が残っているがために、国民国

家の枠を超えた連帯はなかなか生まれない。

付け加えておけば、民主主義が国民国家の範囲で営まれているとき、政治指導者は、将来起きるかもしれない破局の回避のために断固たる行動を起こすことができない傾向がある。そんなことをやっても、忍耐を強いられる現在の国民の人氣は得られないからだ。将来、破局的なことが起きなかったとしても、それが、その政治家のとった対策のおかげなのか、それとも、もともと何もしなくても破局など生じなかったのか区別がつかないので、その政治家が後になって称えられることもない。

だが、コロナ危機に関しては、事情は異なる。破局はもう来てしまっているからだ。われわれは今まさに、パンデミックが引き起こす破局のただ中にいる。そうだとすれば、国民国家の範囲の狭い連帯を超えた、人類レベルの普遍的な連帯への歩みは、今すぐに始まるはず……なのだが、実際に起きていること、そこから予想されるありそうな展開は逆に、国民国家の利己主義の昂進こうしんである。D どうしてなのか。

本来ならば、次のようなことが起きるべき時だ。まず、今ある国際組織、たとえばWHO(注3)とか国連とかの改組と権限強化がすぐに始まるべきだろう。そして、一〇〇年後に振り返ったとき、二〇二一年は世界共和国へのタイド⑤ウの生じた年だった、と思うことになる。……われわれが、コロナのパンデミックを通じて理解したことにすなおに応じれば、実際にはこうなるはずだ。しかし、理解に関してはこれほど簡単なことが、行動においてはまことに困難だ。行動を阻んでいる究極の原因は何であろうか。

国民国家はなぜ争うのか。現在の国民国家は、何をめぐって競争しているのか。かつての冷戦の時代とは異なり、国家たちはイデオロギーを理由に争っているわけではない。国民国家の間の競争もまた、主として資本主義に従属している。つまり、企業だけではなく、国民国家もまた、資本主義的な競争に参加しているのだ。国民国家は主として、自国の資本にとって有利になるように、つまり自国の資本がより多くの利益を生むために戦っている。各国が、④ロコツ①に自国ファーストでふるまうのも、競争の目的が、資本主義的な衝動に基づいているからだ。もしイデオロギーの方が重要だったら、自国ファーストの利己主義に徹することはできなかっただろう。

おおさわまさはち
(大澤真幸『新世紀のコミュニズムへ』)

(注) 1 パンデミック……感染症の世界的流行。

2 ヘーゲル……ドイツの哲学者(一七七〇～一八三二)。

3 WHO……世界保健機関。

問一 傍線部⑦、⑧の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は⑦―**1**、

①―**2**、⑨―**3**、⑩―**4**、⑪―**5**。

⑦ チュウセイ
1
 ① セイテンの霹靂。（きれき）
 ② 本日はセイテンなり。
 ③ セイイに欠ける行為。
 ④ 旅費をセイサンする。
 ⑤ セイミツ検査。

⑧ セツパク
3
 ① ハクシンの演技。
 ② 舟がテイハクしている。
 ③ 真実をハクジツの下にさらす。
 ④ ハクリ多売。
 ⑤ ハクシキな評論家。

⑩ ジさない
2
 ① ジゼン事業。
 ② ジシヨを引いて調べる。
 ③ ケイジジョウ学。
 ④ ジミな色合い。
 ⑤ ジミあふれる言葉。

⑪ タイドウ
4
 ① 真摯なオウタイ。
 ② 道路がジュウタイする。
 ③ タイゼン自若。
 ④ 換骨ダツタイ。
 ⑤ ダイタイ案を出す。

⑫ ロコツ
5
 ① ゴロ合わせ。
 ② 心中の思いをトロする。
 ③ ワイロを贈る。
 ④ ロボウの石。
 ⑤ ダンロであたたまる。

問二 空欄

① a ② e ③ に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は a | 6、
b | 7、c | 8、d | 9、e | 10。

- ① 恣意的 ② 累進的 ③ 短絡的 ④ 現実的 ⑤ 経済的 ⑥ 献身的 ⑦ 普遍的 ⑧ 楽観的

問三

傍線部 A 「奇妙なことではないか」とあるが、筆者がこのように言うのはどうしてか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 11。

- ① 世界大戦が起きるかもしれないという予測がある一方で、コロナ禍の経験を通じて世界共和国への歩みが始まるのではないかという予測も生じているから。
- ② 人々が戦争そのものを悪だと考えるようになっていながらもかわらず、戦争を政治手段のひとつとして容認するような言説が復活してきているから。
- ③ 世界共和国の必要性が認識されているながら世界大戦が予想されるという事態が、きわめて逆説的なものであるにもかかわらず前例にもとづいたものだから。
- ④ 二度の大戦を通じて国家間の問題は解決困難だということが理解されているにもかかわらず、パンデミックの問題は国家間で解決しようとしていないから。
- ⑤ 人々がコロナ禍を経験したいまなら、国家を超えた連帯が模索されるはずなのに、現実には国家間の対立という問題がより深刻になってきているから。

問四

傍線部B「破局の概念化から逃れる残余がある」とあるが、それはたとえばどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **12**。

- ① 地球温暖化が進行していることは認めつつも、どこかの国がいますぐ水没するわけではないのだからと考え、悲劇的結末はやってこないかもしれないと考えてしまうこと。
- ② 第一次世界大戦を経て戦争が悪だと見なされるようになっても、まもなく第二次世界大戦が勃発するというように、破局に向かう戦争が繰り返されてしまうこと。
- ③ 新型コロナウイルスのパンデミックが解決できない以上、地球環境問題や核問題や知的所有権などについての問題も、同様に解決できないだろうと諦めてしまうこと。
- ④ 国際社会のなかで大きな影響力をもっている国家が、自国と自国の企業にとっての破局を避けようとして、気候変動をめぐる国際協定から離脱してしまうこと。
- ⑤ WHOや国連など国際的組織の権限強化を図るといった行動がとられるべきなのに、現状が終末へと向かっている以上、そうした行動は手遅れだとされてしまうこと。

問五 傍線部C「道徳的に洗練されればされるほど、逆にますます暴力的で野蛮になる」とあるが、このように言えるのはどうしてか。その説明として

最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **13**。

① 国家の道徳的な完成形態は社会的秩序が維持されている状態だが、そこでの人々は、国家にすべてを委ねて主体性を失い、血で血を洗うような闘争を繰り返してしまいがちだから。

② 人々が自分の自然権を国家に委ね、それを国家が管理するというかたちで秩序が整えられると、むしろその国の人々は自然権を取り戻そうとして闘争を行うようになってしまうから。

③ 私欲を捨てて国家のために努力するような者は道徳的に評価されるものの、そうした評価を受ければ受けるほど、その人物は自己犠牲的な行動をとるようになってしまうから。

④ 自国に大きな利益をもたらすような国民の行為は、その国家にとってはこのうえなく崇高なものだが、その国家と他の国家との間に闘争状態を現出させるものもあるから。

⑤ 国家と国家との間の競争をなくそうとすればするほど、そうしたことの困難さが意識されてしまい、結果的に国家間の問題を戦争で解決しようとする野蛮なあり方が生じるから。

問六 傍線部D「どうしてなのか」とあるが、その理由を説明したものととして最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解

答番号は **14**。

① コロナのパンデミックという異常な事態をきっかけにして、どの国家もイデオロギーを放棄することになったから。

② 自国の利益を優先させるといふ考え方を誰もとらなくなっているにもかかわらず、各国は資本主義的な競争を行っているから。

③ 国際社会を支えるイデオロギーが力を失ってしまったため、どの国も自国ファーストでふるまわざるをえなくなったから。

④ 人々はいまだに自国の利益を求めており、それぞれの国家は資本主義的な競争における勝利を目指さざるをえないから。

⑤ 国家が競争の目的を見失ってしまい、国家に代わって企業が資本主義的な競争を推し進めていくようになったから。

問七 筆者の考えに合致するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **15**。

- ① 国際的な問題もまずは国家内部で解決しなければ身動きのとれぬ状況に陥るということを、新型コロナウイルスによるパンデミックは、はからずもわれわれに示すことになった。
- ② 世界大戦を経験してもそれへの反省がまったくなされなかったという人類の歴史を振り返ってみれば、そうした大戦の再発を予想することも、あながち間違いとはいえない。
- ③ 新型コロナウイルスによるパンデミックはすでに到来している破局と捉えることができ、そう考えれば、国家を超えた連帯の模索はわれわれにとって急務だといえる。
- ④ 今後一〇〇年単位の人類の幸福や繁栄を左右するような重要な問題について、国民国家のあり方こそが最大の障害だと考えているうちは、その問題の解決は難しいと思われる。
- ⑤ 多くの人々が、コロナ禍を国家を超えた課題と捉えることができないままにその解決を図ろうとしており、そのことが現代の国際社会にさらなる問題をもたらしている。

II 次の文章は、『江戸とアバター』という書籍に収録されているものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

江戸時代のダイバーシティ（多様性）という点、^A「そんなものがあつたはずがない」と感じる方が多いと思う。しかし仕事の種類でいうと、サラリーマンが大半を占めるわけではなく、個人事業主とでもいえるべき農業、漁業、林業、酒造業等々があり、商業は大店から小店、^{(注1)ほてふ}そして棒手振りまで、たいへんバラエティに富んだ規模で展開していた。

大規模店で多種類を売る方法ではなく、ひとつの店やひとりの棒手振りが、一種類の商品の専門家であつた。飴売り^{あめ}と飴細工売りは違う商売で、サンマ売りといワシ売りは異なる人である。かぼちや売りというのもあつて、急ごしらえでやらされる話が落語にある。すぐにできる仕事がたくさんあつたようだ。目の見えない人びとがおこなう仕事の団体もあり、鍼灸^{しんきゅう}、按摩^{あんま}、音曲、そして学問まで、盲人なりの得意分野で活躍していた。

結婚制度を例にとつてみると、今と違つて夫婦別姓、夫婦別財産制であつた。しかも婿入り婚^{むこ}が今よりずっと多かつた。夫婦が同じ姓でなくてはならないとされたのは、明治以降の西欧化の結果なのである。しかし夫婦別姓にも事情がある。中国や韓国が現在でも夫婦別姓であるように、家系が縦に継承されていくのだ。夫婦同姓が、家系を断ち切つて完全に夫婦の単位を社会の単位にしたのであれば問題はなかつたが、実際は結婚後の男性の家系に女性が組み入れられるかたちで近代の結婚制度が成り立ち、婿入り婚が次第に少なくなり、今日のような、選択的夫婦別姓すら成立しない日本社会が出来上つたのである。近現代が江戸時代を超えて多様性容認の社会になつたとは、簡単には言えない。

もうひとつ事例を挙げよう。「末は博士か大臣か」という言葉が近代になつてできた。これは身分制社会ではなくなつて、競争社会になつたからである。誰でもが博士にも大臣にもなれる、わけではないが、目指すことはできるようになつた。しかしこれを別の側面から見れば、日本人全体の目標が極めて狭くなつたことである。樋口一葉^{ひぐち}の作品や日記は、明治時代の立身出世のパターンを外（つまり女性のまなざし）から見ている。そこから分析すると「高等教育を受けて官僚や政治家になる」「そこそこの教育を受けて知識人になる」「教育は受けなくても金持ちや腕のいい職人になる」という三パターンに分類できる。このパターンが現在には十にも二十にもなつたかという点、さほどでもない。「そこそこの教育を受けて知識人になる」の「知識人」が「サラリーマンや役人」に変わった程度だ。その結果、受験競争のなかでの偏差値によつて人をランキングする考え方が固定化し、教育の変革がしにくくなつている。そのうえ極端な高齢化社会となり、資産をもっているかどうかで老後の生活が天と地ほどの違いになる可能性も出てきた。これは「金持ちになる」という目標に^aをかけるかもしれない。

江戸時代はそれに対して、職業と身分と家が一体化した身分制社会で、武家と農家と商家では目標がまったく異なつていた。したがつて身分間での競争は意味がなかつた。相互に雇つたり隷属化したりということも起こらず、上下関係もない。だからといって互いに閉じているわけではなく、職人や商人になる武士も出現した。多くの農民が^⑦機織りや紙漉き^{かみ}で職人化し、それらのものを商うようになった。さらに都市で働くこともある。金持ちの商人

や農民は幕末になると株を買うことで武士身分になることができた。ただしこれはメリットがないので、あまりはやらなかった。それよりも、市場経済が活発になったので、商人や職人や農民の意欲は、それぞれの仕事の工夫と発展として現れ、技術革新が多くなされ、ものづくりが活性化し、流通の面での経済成長率が非常に高い国になったのである。これは流動性と多様化の結果である。

江戸時代のダイバーシティとは、すべての社会的 **b** のなくなった全き自由のあるダイバーシティのことではない。そもそも現代日本を含め、高度に管理されている社会が何の工夫も手立てもなく自然にダイバーシティ社会になるわけがない。民主主義という制度が整っていても、一人ひとりの認識・行動・創造的努力なしに民主主義は実現できないのと同じく、 **B** ダイバーシティはまさに創造的意欲なしには立ち上がらないのである。江戸時代のダイバーシティは社会制度として多様性が容認されていた、というものではなく、身分制度下であるにもかかわらず、自分を多様化する文化が育つていったということなのだ。それは日本文化の一部であるから、私たちはそれを知り、使いこなすことができる。つまりここで言うダイバーシティとは制度としてのそれではなく、生き方としてのそれである。

法政大学は私が総長在任中の二〇一六年に「ダイバーシティ宣言」をおこなった。そこで、「ダイバーシティの実現とは、社会の価値観が多様であることを認識し、自由な市民が有するそれぞれの価値観を個性として尊重することです」と書いた。「認識」「尊重」という行動がなければ、ダイバーシティの実現はない。「性別、年齢、国籍、人種、民族、文化、宗教、障がい、性的少数者であることなどを理由とする差別がないことはもとより、これらの相違を個性として尊重することです。そして、これらの相違を多様性として受容し、互いの立場や生き方、感じ方、考え方に耳を傾け、理解を深め合うことです」とも書いた。「受容」し「耳を傾け」「理解を深める」という行動がなければダイバーシティは実現しない。この宣言の意味は、学生や教職員に対し、そのような認識、行動を大学は称賛し、それに反する行動は認めない、と言っているのである。法律や制度や罰則と同じくらいかそれ以上に、内面にある義(ただしさ・美しさ)の領域や範囲を変えていくことは、社会変革につながりやすい。ダイバーシティへの意識変革は、差別や排除を少しでもなくすることで、社会における無意味な対立やいさかいをなくし、新しい文化・社会資源を積み上げていくことになる。

そこで江戸時代のダイバーシティを振り返っておきたいのである。身分制社会のなかで、その社会およびその最小単位である「家」に縛り付けられている人びとが、 **C** どのように自分を多様化したか、考えてみたい。

私は大学生のときに江戸文学の研究を始めた。その契機となったのが、小田切秀雄ゼミナールで昭和十年代の文学作品を取り上げて発表する、という課題だった。そのときに石川淳の『普賢』^(注3) という作品を読み、石川淳に深い関心をもった。そこで古本屋で全集を買い込んで次々と読んだのだが、そのとき「江戸人の発想法について」というエッセイに出合ったのである。 **D** とにかく驚いた。

江戸に実在した都市伝説の登場人物で、佐久間家の竹という女中がいることから話は始まり、その竹が実は大日如来であるとされたことに話はおよぶ。そこまでは、ほかにも言及したものはある。しかし問題はそれをどうとらえるか、である。石川淳はこの都市伝説の背景に能の「江口」^(注4) があることを示

唆した。撰津の国の江口の遊女が、実は普賢菩薩だった、という話である。「江戸人はその夢を解いて、生活上の現実をもってこれに対応」させつつ、新たな夢をそこに見た、と石川淳は書く。新たな夢とは、身近にいる「竹」という実在の女中が大日如来かもしれない、という夢である。そのことを、「江戸人にあつては、思想を分析する思弁よりも、それを俗化する操作のほうが速かったからである」ととらえた。江口は「歴史上の実在」、お竹はそれを俗化した「生活上の象徴」なのである。「眼をひらけばお竹、眼をとじれば大日如来」という「変相の仕掛」でもある。

「象徴」「転換」「変相」「操作」「仕掛」によって、ひとりの人間のなかに、二重も三重もの存在を読み込む。ただし必ず **X**、ということだ。

そこから石川淳は天明狂歌の話に入る。天明狂歌は「狂名」を使う。これは俳諧の「俳名」や絵を描くときの「雅号」などと同じに見えるが、実は違う。かつてはその名のなかに作者が存在していた。しかし狂名のなかに作者は「不在である」と。狂名は、つぶりの光とか酒上不埒とか鹿都部真顔とかちえのないし知恵内子とか、平安貴族めいたふざけた名前が基本だ。しかし石川淳は言う。「**Y**」と。なぜなら天明狂歌師は「人格ではなく仮託だからである」と。

これは、別の名前に仮託された別の存在。すなわちアバター (avatar) である。

大学生のころの私はアバターという概念でこれを考えていなかったが、ひとりの人間のなかに別の存在を他のひとが読み取る、というだけでも驚き、さらに自ら別の存在に自分を仮託して、そこから近代でいうところのアイデンティティをそつと抜き取る、という操作にもっと驚き、さらにその名前がいくつも作られることや、その操作をするのを誰も不思議に思わないで暮らしていることにも驚いた。一言でいえば自我観念がまったく異なるのである。彼らは自分探しなどおこなわない。自分を次々と作り出しながら才能を分岐させていくのだ。自分を探すのではなく創っていくのである。

「アバター」という言葉は映画の題名にもなった。もともとの意味はインド神話に登場するヴィシュヌ神が、十の異なる化身をもつことに由来し、その一つひとつのことをアバターという。この言葉は日本にも入り、日本語では「**①**権化」とか「権現」とか「化身」と訳されていた。日本において決して新しい言葉でも、新しい考え方もなく、古くからあったのだ。前述した江口は普賢菩薩の化身なのでアバターである。お竹さんは大日如来の化身なので、やはりアバターである。

たなかゆうこ
(田中優子「江戸のダイバーシティ」)

(注) 1 棒手振り……天秤棒をかついで物を売り歩く人。

2 小田切秀雄……文芸評論家(一九一六〜二〇〇〇)。

3 石川淳……小説家、評論家(一八九九〜一九八七)。

4 天明狂歌……江戸時代後期の天明(二七八一〜一七八九)期に流行した狂歌(滑稽味の強い卑俗な短歌)。

問一 傍線部⑦・①の漢字の読み方として正しいものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は⑦―**16**、
①―**17**。

⑦ 機
16 機
 ⑤ ④ ③ ② ①
 きぬ いと はた むの き

① 権化
17 権化
 ⑤ ④ ③ ② ①
 ごんか けんか げんか けんげ ごんげ

問二 空欄 a・b に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は a―**18**、
b―**19**。

- ① 邂逅 かいこう
- ② 桎梏 しこく
- ③ 付度 そんたく
- ④ 拍車
- ⑤ 容赦
- ⑥ 人情

問三 空欄 X に入るものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **20**。

- ① 二重三重の人格は最終的にひとつの人格へと収斂しゅうれんされた
- ② 都市伝説をさらに「俗化」するという思想的「操作」がなされた
- ③ それらの「転換」や「変相」は非日常的な次元において実行された
- ④ 「生活上の現実」を対応させる「俗化」がおこなわれた
- ⑤ 複数の存在にはそれぞれの内面を象徴する名が付けられた

問四 空欄

Y

に入るものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 21。

- ① 狂名がふざけていると、ひっぱたいてみても、作者はそこにいない
- ② ふざけた名前には、びっくりすることに、本人の思想が託されている
- ③ あたかも人格があるかのような名前で、人を煙に巻くのが目的だ
- ④ おかしな狂名に仮託して、本当の自分とやらを探していたのだろう
- ⑤ ばかばかしい名前で、変相することのばかばかしさを伝えたい

問五

傍線部 A 『そんなものがあつたはずがない』と感じる方が多いと思う」とあるが、筆者がこのように言う理由を説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 22。

- ① 現代に比べると江戸時代の方が、仕事の種類もさまざまであり、しかもバラエティに富んだ展開を見せていて、職業ごとの専門性も強かったから。
- ② 江戸時代はダイバーシティについて、あれこれと例をあげながら説明したとしても、そんなものがあつたはずはないと考えてしまう人が多いから。
- ③ いまの日本では職業や婚姻のあり方がきわめて多様化しており、そうした現代を基準にすると、江戸時代は画一化した社会だったように感じられるから。
- ④ ダイバーシティという観念自体が一般的なものではなく、ましてやそうしたものが江戸時代にあつたことは知られていないだろうと考えられるから。
- ⑤ 江戸時代を、それがどうい時代だったかという内実をよく知らぬまま、近代と異なる時代としてイメージしている人が多いように思われるから。

問六 傍線部B「ダイバーシティはまさに創造的意欲なしには立ち上がらないのである」とあるが、ここでいう「創造的意欲」とはどのようなものか。

その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **23**。

- ① 高度に管理されている現代社会がダイバーシティ社会になるためには工夫や手立てが必要だということを、民主主義社会の常識として定着させようとする事。
- ② 人間とは多様な存在であるという考え方を認めたくえで、そうした多様な人間が誰でも同じく社会のなかで活躍できるように制度を整えていくとすること。
- ③ 自分とは異なる存在としての他者を受容し理解することが、人間にとっての正しいあり方であるという意識を、個々人が自分のなかに作り上げていくとすること。
- ④ いまの社会のなかにあるダイバーシティ実現のための制度をすべて見直し、生き方としてのダイバーシティというものを、制度にとらわれず確立させていくこと。
- ⑤ 他者のあり方を受容し、他者の言葉に耳を傾け理解するといった行為を繰り返しながら、人と人とのあらゆる差異をなくした完全に自由な社会を作り上げようとする事。

問七 傍線部C「どのように自分を多様化したか」とあるが、それについての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークし

なさい。解答番号は **24**。

- ① ありきたりの人物が実は普賢菩薩だったという都市伝説などが示すように、江戸の人びとは宗教の力を頼みにしながら、多様な人間像を生み出していった。
- ② 身分や家といったものに縛り付けられていた人びとが、別の名前をもった存在に自らを仮託するなどしながら、身分制社会を超えた自由な世を作ろうとした。
- ③ 自分のなかに別の自分を見出し、それらに名前を付けて新たな自分を生み出すといったことを繰り返しながら、人びとは自分とは何者かということを探索していた。
- ④ 職業と身分と家とが一応は一体化している身分制社会のなかで、人びとは別の名前をもった仮の存在としての自分を自在に設定するなどして、新しい自分を作り出していった。
- ⑤ 自分にさまざまな別の名前を付けることで複数の人格を生み出し、その複数の人格を使い分けるといった行為を通じて、人びとは多様な生を楽しんでいた。

問八 傍線部D「とにかく驚いた」とあるが、筆者が「驚いた」のはなぜだと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、

その番号をマークしなさい。解答番号は **25**。

- ① 大学の授業で出会った昭和の作家の文章を契機にして、江戸時代の人びとの多様な生き方などを知り、当時の人びとの思弁の深さに驚かされたから。
- ② 江戸時代の人びとの自分や自我といったものに対する考え方が、近代的な常識とはまったく異なっていたことを、はからずも知ることになったから。
- ③ 自分が深い関心をもった作家のエッセイを読んで、江戸時代に実在した都市伝説やその登場人物のことを知り、江戸時代に興味をもつことになったから。
- ④ ひとりの人間のなかに二重も三重もの人格を作りながら、本当の自分を模索していくという江戸時代の人びとの生き方を、思いがけず教えられたから。
- ⑤ 別の名前に仮託された別の存在がアバターと呼ぶべきものだというを知り、江戸時代が現代に通じる新しさをもっていたということに気づいたから。

問九 筆者の考えに合致するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **26**。

① 明治時代の日本人は、江戸時代と違って立身出世という目標を目指して生きるようになったが、やがて目標は狭くなり、その後はそうした目標そのものが見失われるに至った。

② 江戸時代の人びとは身分制社会に管理されながらも多様性を実現しようとしていたが、人びとを管理しようとする社会的制度の力が弱まった現代日本では、かえって多様性の実現が困難になってしまった。

③ アバターという言葉は映画の題名にも使われるようになったが、その言葉が表現している概念は江戸時代の都市伝説に端を発するものであり、日本では必ずしも新しいものだというわけではない。

④ 江戸時代の自由は身分制のなかに成立していたが、現代日本に生きる私たちには、そうした限定的な自由を超え、完全な自由が自ずと成立するような社会の確立が求められている。

⑤ 近代以降の日本は江戸時代のような身分制社会ではなくなったが、そこに生きる人々が江戸時代よりも多様な生き方をしていくかどうかについて、にわかに結論づけることはできない。

国語（F）（マークシート式・60分・100点）

大問	小問	細分	正解	配点	大問	小問	細分	正解	配点	
I	問一	1	③	2点	II	問一	16	③	2点	
		2	②	2点			17	①	2点	
		3	①	2点		問二	18	④	2点	
		4	④	2点			19	②	2点	
		5	②	2点		問三	20	④	4点	
	問二	6	④	2点		問四	21	①	4点	
		7	⑦	2点		問五	22	⑤	6点	
		8	⑤	2点		問六	23	③	7点	
		9	②	2点		問七	24	④	7点	
		10	⑥	2点		問八	25	②	7点	
	問三	11	⑤	6点		問九	26	⑤	7点	
	問四	12	①	6点						
	問五	13	④	6点						
	問六	14	④	6点						
	問七	15	③	6点						